

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2017年 春号

第8巻第1号 (通算21号)

2017年3月31日発行

モンリアル滞在記

立花 英裕 (早稲田大学)

本来なら、会長就任の挨拶を書くべきところなのかもしれません。しかし、会長に選出されてから少し時間が経ちましたし、すでに AJEQ のホームページにそれに当たるものを載せています。そこで、屋上屋を重ねるようなことは避け、2014年にモンリアル市に9月初めから1月初めまで滞在したときのことを一種の報告として書くことにしました。

今回のケベック滞在は在外研究の一部を利用したものです。滞在期間は4か月ですが、私にとっては比較的長期となり貴重な体験でした。住まいはコット＝デ＝ネージュ地区のラコンプ通り。モンリアル大学の傍の落葉樹が連なる閑静な並木道でした。秋口に着いたので、家を出て空を見上げると落葉樹の大木が葉をひろげていて、秋が深まるにつれ色が移っていきました。モンリアルは太陽が低いのでしょうか。空の低いところに懸かっている散歩すると目にま

ぶしく入ってきました。白い光線の矢を輝かせ、なにか不思議に透明でした。その年、冬は早く来ました。11月10日頃に雪が降り、消えずに積もったままでした。私は10歳くらいまで雪国に住んでいたもので、それほど苦になりません。12月末には tempête がありましたが、夜闇に狂ったように舞う雪は幻想的でした。気温が下がると歩道の氷が鏡面のようになり、足を滑らせたくないの用心して脇の盛り上がった雪の上を歩きました。すると、ガラス細工が割れるような繊細な音がしました。

滞在中、できるだけケベックの普通の人と出会い、社会を知るように心がけました。科学的なデータも大事ですが、私はいつもその社会の日常を知りたい気持ちになります。それでも一般家庭の人々とのおつきあいは限られていましたが、モンリアル大学のゼミに出席して学生たちと親しくなりました。ミシェル・ピエルサンス教授のゼミ

●本号の内容●

巻頭言…1 追悼…3 第2回西日本研究会 (ライシテ・シンポジウム) 参加報告…5
韓国ケベック学会参加報告…7 リレー連載「ケベックと私」第3回…10

「女性の知 *Savoirs des femmes*」では、女性の発言をたくさん聴きました。全体に女性は生き生きとしていて、控えめながら堂々としています。フランスともアメリカ合衆国とも異なる雰囲気がありました。

コット＝デ＝ネージュ通りのバスに乗って何回かウォルマートに行きました。大きなモールの入り口近くにテーブルが並んでいて、周囲に各国料理の店が連なっているホールがありました。フランス語はほとんど聞かれません。明らかに英語が共通語です。移民の人たちの表情にフランスで見るとは違う気持ちの余裕と自由が感じられました。

モンREALでは多くの人に会いました。AJEQ に講演に来た小説家アンドレ・ジラルールさんにも再会しました。彼は私をケベック大学モンREAL校 (UQAM) に案内してくれました。ご承知のように、UQAM は「静かな革命」の最中、1969 年に設立された大学です。だから今でも「革命」の精神がどこかに残っています。ジラルールさんは、日本では見せなかった表情でテーブルを叩くようにして学生時代のことを話してくれました。シャペルのあるモンREAL大学とは別世界でした。

ジェラルール・ブシャール教授にも会いました。1 回目は、モンREAL市内のホテルで会ったのですが、たまたまテレビで彼が論争をしているのを観ていたもので、そのことに触れました。すると「でも、みんなケベックを愛しているんだ」という答えが返って



Vieux-Port の近くにて

きました。どんなに政治的見解が対立しても、基本的なところでは誰もがケベックを愛していて、その点では一致しているのだということなのでしょう。民主主義社会とは何かを考える材料がそこにあります。その後、サグネーまで彼に会いに行きました。彼は車の運転が好きで、なんとルイ・エモンが住んだ家が残っているペリボンカまで連れて行ってくれました。あまりに運転がうまいというか、おしゃべりしながら苦もなく運転するので、それを褒めたら、父親はトラックの運転手だったと、家族の話をしてくれました。トラック運転手の家庭から高名な学者と州政府首相経験者が出たわけです。おそらくブシャールさんの家庭には知への飽くなき欲求があったのだろうと私は想像しました。ブシャール教授の話を

聴いていると、ガストン・ミロンの文学を理解する鍵が隠れているような気がしました。ミロンの父親は建具大工でした。詩人ミロンと学者・小説家ブシャールではずいぶん立場が違いますが、根底において同じ知への情熱を共有しているようです。その情熱は植民地的な状況におかれた社会に共通しているのかもしれませんが。マルチニック島の詩人エメ・セゼールの少年時代を想いました。植民地的状況においては一種独特の知への飢餓があり、そこから構築される知的文化はいわゆる「古い国」のそれとは違うのです。

ケベックで会った人をもう一人だけ挙げるとすれば、エルヴェ・フィシェという哲学者ないし社会学者です。彼はフランス人でパリの高等師範学校に在学し、レイモン・アロンの指導を受けたと言っていました。しかし、1980年代のパリの知的雰囲気は自分に合わない判断して、大学の職を捨てモンレアルに住みついたのです。そんなことができたのは、彼が現代絵画の画家でもあるからです。今年の夏に、パリのポンピドー文化芸術センターで彼の展覧会が開かれることになっているそうです。こんな型破りの人が住める場所がケベックなのでしょう。ダニー・ラフェリエールもそうした一人です。ウォルマートのモールの人々を見ても、大学の学生を見ても、ケベックの移民は窮屈な様子をしていません。路上で警察の尋問を受けることもあまりなければ、滞在許可証のことで頭を悩ますことも、他

と比べると少ないのでしょう。知への植民地的飢餓と「歴史なき人々」と言われる移民の情熱、その融合にケベック社会のエネルギーの源泉があるのだらうと思いました。

(日本ケベック学会会長)

<追悼>

池内 光久氏 (1937-2016)

竹中 豊 (カリタス女子短期大学)

池内光久さんは、ロマン派のダンディズムを地でいくような人だった。あか抜けした知性の持ち主、ちょっとオシャレで蝶ネクタイがピッタリ似合う、そして粋なジョークを何よりも愛した人だった。そして世界を良く知る実務家でもあった。

池内さんは、“安全”には非常に気をつかう人だった。たとえば、一緒に飲みに行くとき、先ずは「非常口」の確認から始まる、といった具合である。これは、東京海上火災保険（現在の東京海上日動火災保険）に長年勤務され、リスク・マネジメントに深く関わっておられたためだろう。そんな池内さんだったが、あろうことか2015年3月、東京・小金井のゴルフ場で転んでカートに頭をぶつけてしまった。救急車で病院に運ばれ、その後手術は成功し、療養生活を送っていたものの、悪性の脳腫瘍のため、ついに2016年12月21日、永遠の世界へと旅立ってしまった。享年79歳。

一橋大学経済学部卒業、および中央大学法学部専攻科を修了された池内さんは、損



在りし日の池内光久氏 (2012 年 9 月 24 日)

害保険の分野で活躍されたビジネスマンだった。だが、決してビジネスの世界のみに閉じこもる狭い人でなかった。カナダおよびケベック研究に関わる分野でも、幅広く精力的に活躍された。営利追求型でない、深い教養人としてのビジネスマンの姿がそこにあった。

カナダとの関わりは、米国カリフォルニアでのリスク・マネジメントの研修に参加し、その後、モンリオールで開催されていた万博を見学したのがきっかけだった。1967 年のことだ。カナダ“建国”100 周年にあたり、国をあげての熱気が最高潮に達していた時だ。7 月にはフランスのドゴール大統領がモンリオールを訪れ、市庁のバルコニーから分離派の標語《Vive le Québec libre!》と叫び、ケベックでは歓呼、連邦政府からは非難、という大きな物議を醸しだしていた時でもあった。そんな姿を見聞したことが、ケベックとカナダに対する関心の起点だった。カナダへの関心は、その後約 10 年トロントでの在勤により、ますます深まっていく。

帰国後、カナダ・ケベックをめぐる研究は、まずは日本カナダ学会 (JACS) との関わりから始まった。実はカナダ・ケベックの経済について、現場を踏まえてキチンと語れる日本人研究者はきわめて少ない。池内さんは、その意味で誠に貴重な存在だった。たとえば 2003 年 9 月の JACS 年次研究大会では、「ケベックの変容—3 つのパーспекティブから—」とのテーマで、シンポジウムが開催された。経済は池内さん、文学は故小畑精和先生 (明治大学)、そして政治は竹中がそれぞれ問題提起し、コメンテーターには著名な歴史家のポール・アンドレ・ラントー教授 (ケベック大学モンリオール校) をお迎えしていた。池内さんは「ケベック・ナショナリズムとグローバル・エコノミー」と題し、歴史をしっかりと踏まえながら、現代ケベック経済を見事に分析された。後に、故小畑先生から AJEQ 創設の話が出てからも、池内さんは新学会創りに積極的にかかわっていった。とくに基幹となる AJEQ の規約づくりや、会計・マネジメントについては、実務経験をいかして貴重な提言をしていただいた。やがて AJEQ 監事も担うことになるが、AJEQ 誕生とその後の発展にとり、池内さんはなくてはならない存在だった。他方、明治大学での「ケベック講座」では経済分野を講義され、また明治学院大学、多摩大学、大阪女学院大学などでも教鞭をとり、教育面でも熱心に貢献された。

多忙な実務家の池内さんではあったが、

著書 (共著・共訳) も多い。その主なものには、『カナダの旗の下で』(彩流社、2003 年、カナダ首相出版賞受賞)、『ケベックを知るための 54 章』(明石書店、2008 年)、『カナダを旅する 37 章』(明石書店、2012 年) などがある。ただ、池内さんの文章は句読点が比較的少なく、長い節の傾向が強いので、一般読者には少し読みづらいところがあったかもしれない。そこで『ケベックを・・・』の编者だった私は、「もう少し句読点を多くして、短めの文体にさせていただきませんか」と提言したことがある。すると返ってきた言葉は、「いや～、肺活量が少ないものですから息切れしちやって、文体が長くなってしまうのですよ。スイマセン。」だった。ユーモアと謙虚さあふれる言葉に、思わず大笑いしたものだ。

2011 年には池内さん、元在カナダ日本国大使田島高志氏、竹中らとともに、カナダについての知識の普及を目指して、NPO 法人日本カナダ検定協会を立ちあげた。池内さんの大奮闘ぶりもあり、検定試験は数回実施されたものの、資金繰りなどの問題で、残念ながら 2015 年に同協会は解散せざるを得なかった。恐らく、晩年の池内さんにとって、これは唯一の心残りだったろう。ただここで裏話をすれば、検定試験の作問にあたって、お互いのメールでのやりとりの標題には“合い言葉”を決めていた。それは、『カナダ・ジョーク』。

そして 2016 年 12 月 29 日。東京・代々幡斎場での告別式には、さまざまな分野の人

が参列していた。そのことは幅広い交友関係のあった池内さんの人柄を物語っていた。祭壇に飾られた池内さんの遺影・・・それは実に優しい笑顔だった。そう、池内さんは、まるで《生きるように亡くなった。》



第 2 回西日本研究会 (ライシテ・シンポジウム) を振り返って

荒木 隆人 (岐阜市立女子短期大学)

去る 1 月 21 日 (土)、金城学院大学サテライト (愛知県名古屋市栄) にて、「社会における脱宗教 (ライシテ) について考える」というテーマでシンポジウムが開催された。西洋における代表的なフランス語圏の国と地域であるフランス、ベルギー、ケベックの脱宗教 (ライシテ) を比較するため、5 人の研究者による発表が行われた。この度のシンポジウムは金城学院大学キリスト教文化研究所主催で、日本ケベック学会とベルギー研究会の共催 (それぞれ第 2 回西日本研究会と第 67 回研究会) の形で開催された。参加者は 23 名であったが、ケベック学会会員やベルギー研究会会員のみならず、多方面からの参加が見られた。

シンポジウムは、初めに丹羽卓会員 (金城学院大学) による、ライシテの概念についての基本的説明がなされた後、以下 5 人

の研究者による発表が行われた。

第一の発表は、立花英裕会員（早稲田大学）による、「ライシテの起源—イタリア・ルネサンスを中心に」であった。立花会員の発表の趣旨は、ライシテの起源をルネサンス期のイタリアに遡ることができるものであるとすものであり、具体的には、最初のルネサンス人としてのアシジの聖フランチェスコが、宗教的実践における選択的自由を各個人に与えることで、世俗社会に一定の自律性を与えたこととされ、そのことが「市民社会と宗教社会の分離」への第一歩を意味したというものである。

第二の発表は、稲永祐介氏（大阪市立大学/CNRS-GSRL 非常勤研究員）による「フランスの政治文化としてのライシテ：近代の統治技法、あるいは共和国のイデオロギー？」であった。フランスでの研究歴が長い稲永氏は、統治権力としての国務院の役割に注目し、ライシテ原則に関する行政訴訟を検討する中で、フランスにおける法制原理として実定法に基づく国家行政の中立の原則が確立されてきた過程を明らかにした。

第三の発表は、見原礼子氏（長崎大学）による「ベルギーのライシテと宗教多元性—公教育における二つの論争から」であった。見原氏は、宗教の多元性が制度化されているベルギーが、近年ムスリム移民の増加の過程で、公教育におけるライシテ化を強く意識するよう変容してきていることを、公教育における二つの論争、すなわち、宗

教教育・非宗派道徳教育の実施及び宗教シンボル着用の是非を巡る論争の検討を通じて明らかにした。

第四の発表は、丹羽卓会員による「ケベックの『開かれたライシテ』—自由主義と共和主義の狭間で」であった。丹羽会員は、ケベックにおける近年のライシテに関する 3 つの出来事（「妥当なる調整」をめぐる騒動、ブシャール＝テイラー委員会、ケベック価値憲章）及び現在問題になっている 2 つの事例（第 62 号法案と地方議会の開始時の祈祷を巡る判決）を検討しながら、ケベックのライシテは、共和主義に寄ったり自由主義に寄ったりとコンセンサスが未だ存在しないという問題点があることや、宗教シンボルを伝統遺産とすることを通じてマジョリティの精神構造を普遍化することがマイノリティを抑圧する危険性があることを指摘した。

第五の発表は、伊達聖伸会員（上智大学）による「フランス、ベルギー、ケベックのライシテを比較する—成り立ちと現在の課題



研究会の様子

から」であった。伊達会員は、フランス、ベルギー、ケベックのライシテの歴史的生成過程を検討した上で、フランスはライシテが社会全体の組織原理である中央集権的な「共和主義」であり、ベルギーはライシテが多元主義的な社会の一角である「多元主義」、ケベックはマジョリティとマイノリティの対話を通じた社会統合を志向する「間文化主義」として大まかに分類できるとした。続いて、これらの 3 つの社会はそれぞれ共通の課題である公立校における宗教教育とヴェール着用問題に対して異なる対応を行った点を指摘した。

発表後には、自由討議の時間が設けられ、多くの質疑応答が行われた。紙幅の都合によりその全てを取り上げることはできないが、例えば、フランスは公共空間に関しては国家の中立性に対するこだわりが強いのに、暦などの時間に関してはそうではない（未だに祝祭日にはキリスト教の聖人の名前などキリスト教文化の影響が強い）ことへの疑問がフロアから提起された。この質問に対して、発表者の稲永氏からは、公教育の問題としては、近年のフランスは時間の面でも国家の中立性の方向性にもっていかうとする傾向にあるという返答がなされた。

また、別の質問として、ライシテの価値観を巡る議論には、本シンポジウムで主要議題となった宗教シンボルの議論と教育に関する議論だけではなく、人工妊娠中絶や安楽死、同性婚の話が入ってくるのではな

いかという質問があった。この質問に対し、発表者の伊達会員からは、それらは習俗のライシテとしてフランス、ベルギー、ケベックでもライシテの問題系で捉えられるという返答がなされた。

さらに、カトリックが強いはずのベルギーの方が安楽死の法制化がなされているのに対し、世俗化が進んでいるはずのフランスでは法制化がなされていないことについての疑問も提起されたが、この質問に対して、伊達会員からはフランスでは道德倫理問題に関してはカトリックの意見が今日でも時々において重要な影響を及ぼしているという返答がなされた。

シンポジウム終了後は、シンポジウム会場近くの韓国料理屋で懇親会が行われ、出席者は有意義な時間を過ごすことができた。



韓国ケベック学会 (ACEQ) 2016 エピローグ編

杉原 賢彦

昨年 11 月に開催された第 18 回 韓国ケベック学会 (ACEQ) の大会は、いまやケベック州内、カナダ国内にとどまらず、フランス、さらに世界中を虜にしている若き映画作家グザヴィエ・ドランを採り上げ、その作品世界を探究するという、世界的に見ても野心的なものだった。

2009 年、19 歳にして撮った処女作『マイ・マザー』(J'ai tué ma mère) がいきなりカンヌ映画祭の監督週間に招待されるという型破りなデビューを飾り、その後もカンヌ映画祭を舞台に、昨年は長編第 6 作『たかが世界の終わり』(Juste la fin du monde) がグランプリを獲得 (パルム・ドールに輝いたケン・ローチの『わたしは、ダニエル・ブレイク』(I, Daniel Blake) に続く第 2 席)。27 歳の神童をめぐる言説は、フェノメナルと言っても過言ではない状況ながら、本格的なドラム研究はまだ端緒にもついていない。そんななかで行われた ACEQ の試みはきわめてスリリングなものと言えよう。

加えて、時あたかもパク・クネ大統領をめぐる疑惑が頂点を迎えようとするなか、ソウル市内はこののちの大規模デモの口火を切った時期でもあり、週末のソウル市内は 20 万人、さらに 80 万人ものデモ参加者を集めつつあった。

仁川国際空港に着くや、今回の大会の企画を立てられた成均館 (ソンギョングァン) 大学のパク・ヒテ (PARK Heui-Tae) 先生よりご教示いただいた通りにソウル市内行き



レトロスペクティヴの会場となったシネマテーク

のリムジンバスのチケットを買って乗り、市内中心街の鍾路 (チョンノ) 区へ。大会に合わせて組まれたドラム・レトロスペクティヴの会場となっているシネマテークに向かう。屋台が並ぶ夕闇のソウル中心街に、まるでアルコールのように奥まった一面にシネマテークは存在した。シネマテークとはいえ、公設のものではなく、アート系ミニシアターのマルチプレックスと云っていい内部スペースでは、レトロスペクティヴを言祝ぐレセプションがいましも始まったばかり。それも早々に、韓国国内では釜山 (プサン) 国際映画祭に続いて 2 度目の上映となる『たかが世界の終わり』のプレミア上映が始まる。

韓国において、ドラム作品は若者層を中心に支持され、観客動員ではすでに日本をしのぐ規模を誇るほど。今回のプレミア上映でも、200 席ほどの会場は抽選に当たったドラム・ファンで埋め尽くされていた。そして上映後、パク・ヒテ先生に加えて高麗大学のイ・ナラ (LEE Nara) 先生も登壇されてのティーチインが行われ、ドラム作品をめぐるきわめて熱い対話が交わされたようだった (学生時代、ハングルを学ぼうとして学ばなかったことをこのときほど悔いたことはない)。

終了後、その熱気も醒めやらぬまま、翌日の第 18 回 ACEQ 大会会場となるソンギョングァン大学のゲストハウスへと向かったのだが、道中、パク・ヒテ先生と日韓の映画をめぐる状況について話せたのが大

きな収穫でもあった。

そして翌 11 月 12 日 (土曜日)、ACEQ の大会は午後から始まるのだが、待ち合わせ時間になっても誰も現れない。30 分近く経ってようやく ACEQ 会長であるハン・ヨンテク (HAN Yong-Taek) 先生がいらっしゃったのだが、前週の 4 倍となる 80 万人もの規模にまで膨れあがったデモ参加者のため、市内の交通網が麻痺、それで遅れてしまったとのこと。まさに韓国国内が風雲急を告げるようななかでの大会となった。

会場となるソングングァン大学は、アジアのみならず世界最古の大学校とも言われており、1398 年の創立。ソウル大学にもほど近く、前日、ドラン・レトロスペクティブが上映されたシネマテークからもそれほど遠くない、同じチョンノ区内にある。

当日の発表プログラムは、ACEQ 前会長のイ・ジソン (LEE Ji-Soon) 先生によるケベック発のテレビドラマ *Le Survenant* をめぐる発表から始まり、第 1 部はドラン作品の外堀を埋めるようなかたちで進行 (筆者自身の発表もこの第 1 部に含まれる。さら



ソングングァン大学
ひと足早い紅葉も楽しめた

に、淑明 (スンミョン) 女子大学のイ・カヤ (LEE Kaya) 先生による「ドラン映画における文化的マイノリティ」をめぐる発表が加わる)。

そして第 2 部では、前日のティーチインでも登壇されたイ・ナラ先生とパク・ヒテ先生がドラン映画の核心部へと迫る発表を行われた。両者ともに韓国語による発表だったため、詳細な内容は把握しきれなかったが (ふたたび悔やむことしきり)、イ・ナラ先生の発表ではディディエ=ユベルマンのフラ・アンジェリコ論を手がかりとしてドラン作品に対する図像学的アプローチが試みられ、そしてパク・ヒテ先生の発表では、ドランをめぐるさまざまな言説をすべて開陳したうえで、それらを検証し、かつ覆すことによって、新たな見方を提言されていたようだった。ドラン映画にどう接近し、どう読み解いてゆくのか、ひと筋縄ではゆかないその魅力を改めて多方向から検討されていたように思え、わさわさとした刺戟を全身に受けたのだった。

ドラン作品とその周辺をめぐる研究は、まだ日が浅い。その端緒となるであろう ACEQ の第 18 回大会は、短いながらも充実したものだったように思う。ソウル中、否、韓国中が沸き立つようなデモの熱い空気のなかで、ドランをめぐる大会もまたさらに熱く、そして歓迎もまた快く厚く、あわただしい滞在ではあったが、忘れがたいものとなった (大会終了後の懇親会でいただいた韓国伝統料理の美味しさも含めて)。

＜リレー連載「ケベックと私」第 3 回＞

CINARS (国際舞台芸術見本市) と HEC (モン
レアル大学経営大学院)

曾田 修司 (跡見学園女子大学)

私のケベックとの関わりは、1990 年代に
遡る。モンレアルでは、CINARS (仏語読み
でシナール) という国際舞台芸術見本市が
1984 年以來、2 年に一度開催されている。
舞台芸術の見本市とは、簡単に言えば、舞
台芸術業界の関係者 (プロデューサー、フ
ェスティバル・ディレクター、アートマネ
ージャー、ディフューザーなど) が世界中
から集まり、商品 (舞台公演) の流通を促進
するための催しである。2016 年の CINARS
は 17 回目の開催となったが、その 6 日間の
会期中には、世界 40 か国・地域から、1500
人の関係者が参加した。

私が CINARS に参加し始めたのは 1990
年代半ばからである。1995 年の「東京国際
舞台芸術フェスティバル」の開催に合わせて、
演劇プロデューサーの中根公夫氏のイ
ニシアティブにより、日本 (東京) で第 1 回
の「芸術見本市」が開催されることになり、
私は、この「芸術見本市」の立ち上げの際の
事務局運営に携わっていたので、いわば
CINARS の東京における新たなパートナー
組織の担当者として参加したのである。な
お、「東京国際舞台芸術フェスティバル」の
前身は「東京国際演劇祭」であり、その後何
回かの組織変更を経て、現在は「フェステ
ィバル/トーキョー (F/T)」として開催され

ている。

CINARS は、米国以外で開催される舞台
芸術 (パフォーマンス・アーツ) の国際流通
のための見本市の先駆けであり、成功例で
ある。CINARS の創設者であるアラン・パ
レ氏は、その成功の要因として、地元モン
レアル (またはケベック州) のパフォーミ
ング・アーツのクオリティの高さをあげて
いる。サーカスのシルク・デュ・ソレイユ、
ダンスのカンパニー・マリ・シュイナール、
ラララ・ヒューマンステップス、演劇のロ
ベール・ルパージュ等、1980 年代に一斉に
国際的な表舞台に登場したケベックのアー
ティストたちが当時の世界の観客たちに与
えたインパクトの大きさは大変なものだっ
た。

さて、私は、2016 年 4 月から 2017 年 2 月
までの 11 か月間、勤務先である跡見学園女
子大学の海外研究留学制度を利用して、モ
ンレアルの HEC (モンレアル大学経営大学
院) にゲスト・リサーチャーとして滞在し
た。いつもの短期滞在と違い、長期に滞在
してみて初めて見えてくるのがいくつも
あった。

モンレアルには実に多くの劇場がある。
ダンス、サーカスが特に盛んな印象がある
が、オーケストラもオペラもバレエも演劇
も、それぞれに一流のものが提供されてい
る。演劇は、フランス語劇、英語劇ともに、
モリエールやシェイクスピアなどの古典劇
から近現代演劇の名作、日本の小劇場演劇
を思わせるような創作劇まで、多種多様の

演劇を見ることができる。新聞で扱われる劇評の紙面の大きさ、街中の大きなアドボード、テレビでの CM など、一般の人たちにとって、普段見かける演劇の存在感は日本でのそれよりも格段に大きいように思われる。有力な劇場や劇団の公演には、たいいてい新聞社やテレビなどのメディアがメディア・パートナーとしてサポートしている。公演終了後のアンコールでのスタンディング・オベーションなど、客席の熱はモンレアルの方が明らかに上だ。

ここで、今回の滞在中に得られた私にとっての文化政策に関する新しい知見の中から、2 点ほどをごく簡略にご紹介したい。一

つは、HEC 准教授である G・グランモン氏の新著 *La culture, un capital à faire fructifier* (発行=HEC) によるものである。同書は、内容からタイトルを意識すると、『文化資本を活かす文化政策』とでも訳するのが適切かもしれない。同書の中で、著者は、1970 年代以降のケベックの文化政策において、プロ化 (プロフェッショナルリゼーション)、産業化 (インダストリアライゼーション) が非常に重要な要素であったことを指摘している。これを読んで、私は、シルク・デュ・ソレイユと CINARS は、プロ化と産業化という 2 つの動きの連動によって成立した事例の好例であることに気づかされた。



日本から CINARS2016 に参加した関係者とシルク・デュ・ソレイユ新作に出演予定のアーティストたちが複合文化施設プラスデザールの一隅でバツァリ出合って記念撮影 (2016 年 11 月 20 日、写真の最後方中央が筆者)

もう一つは、HEC 教授の F・コルベール氏による *Marketing Culture and the Arts* (発行=HEC、第 4 版、2012 年) に紹介されている文化とアートに関する 4 種の市場 (後述) の存在を参考にすると、文化政策においてアーティストへの支援を決めるのは何かの権威的関与 (審美的または政治的な理由) によってではなく、市場によるのが最も適切であることも再確認した。ここで詳細を説明する余裕はないが、前掲書においてコルベール教授が、市場には (広く一般に認識されている) 「消費者市場」だけではなく、「パートナー市場」、「民間市場」、「政府市場」をあわせて 4 種の市場が存在すると解説していることが特に注目される。この 4 種の市場は、それぞれ、観客、ディストリビューター (劇場、コンサートホール、フェスティバルなど)、スポンサーとメセナ、公的支援機関による支援 (または文化支出) に対応しているので、実は (消費者市場の意味での) 「市場」一辺倒のとらえ方ではなく、文化振興政策全体をバランスよくとらえることができる理論になっている。この視点は非常におもしろく、今後の日本の文化政策を考える際にも大変重要だと思われるので、今後、同書の内容紹介とともに、私自身の研究課題としてもさらに追求していきたいと考えているところである。



●編集後記●

昨年末、本学会設立に際して多大な貢献をされた池内光久会員 (前監事) の訃報が届きました。そこで、長年親交のあった竹中豊会員 (元副会長) に追悼の辞をご寄稿いただきました。それを含め、今号も充実した内容となりました。執筆者のみなさんに感謝いたします。

さて、ニュースレターでは、モンレアルとモントリオールのように、フランス語読みと英語読みの地名表記が混在しています。統一できればよいのですが、そう簡単にはいかないのがケベックの難しいところであり、またおもしろいところでもあるのかもしれませんが。3月中旬、約 7000 の署名を得て、道路標識に英語併記を求める請願が州議会に提出されました。実現すれば画期的な話であり、議会および政府の対応が注目されます。(T)

日本ケベック学会 (2017 年 3 月現在)

●主要役員

立花英裕 (会長)
伊達聖伸 (副会長)
丹羽 卓 (副会長)
矢頭典枝 (副会長)
小倉和子 (顧問)
C・ドゥロンジェ
(顧問、ケベック州
政府在日事務所代表)

●広報委員

大石太郎
丹羽 卓
片山幹生
杉原賢彦
S・コルベイユ
小松祐子

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎